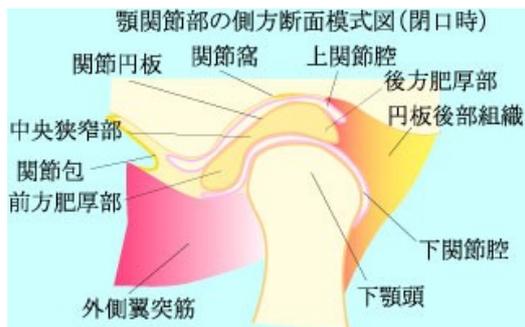


顎関節症の基礎知識2

今回は顎関節症の分類についてお話ししたいと思います。

顎関節の構造



顎関節症の分類

顎関節症は痛い場所や原因によって分類されています。その分類によって治療法も変わります。

I型 主に筋肉の痛みを主症状とするもの。顎の関節にはほぼ問題はないのですが、**顎を動かす筋肉が痛い**場合です。**関節の音や痛みはほとんどありません**し、引っかかる感じもありません。もちろん、(痛みを我慢すれば)口を大きくあけることもできます。

II型 関節包内部の微小外傷を主症状とするもの。これは**顎の関節のねんざ**みたいなもので、関節の内部が傷んでいるが、構造の大きな変化を伴わないものです。**関節からの音はパキパキパキ等の小さい音がする**事が多いです。また、**軽い痛みを伴う**事があります。ただし、痛みを我慢すれば口を大きく開けることもできます。

III型 a **関節円板の位置が変わり、顎を動かすことで関節円板が正常な位置に戻るもの。**ここからは顎関節に構造上の変化がありますので、**特に治りにくくなってきます**。骨と骨がぶつからないようにある座布団(関節円板)が口を閉じている時は正規の位置からずっこけていて(主に前方が多い)、それが口を開ける過程で、関節円板が正規の位置に戻る状態をいいます。このとき、やや引っかかる感じと共にカクンと割と大きい音がします。また、閉じてくるときも同様の音になり、口が閉まります。ただし、この状態で何年も経過しますと、音と引っかかり感はいさくなります。口を大きく開くことはできます。

III型 b **関節円板の位置が変わり、顎を動かしても関節円板が正常な位置に戻らないもの。**III型は基本的に座布団(関節円板)がずっこけている状態をいいますが、それが口を開けても座布団が正規の位置に戻らない状態をいいます。音はあまりしないか、パキパキと小さな音がすることがあります。この型に最初からなるわけではなく、**IIIa型からの移行でIIIb型になります**。移行した当初の痛みは大きく、だんだん少なくなります。**開口量も痛みが大きいときは指1本程度しか開きませんが**(この状態をクローズドロックといいます)、そこから半年、1年ほど経つと、3本くらい開けられるようになりますが、**決して治ったわけではありません**。ただ、慢性状態、症状固定になったにすぎません。ですから、体調、ストレスによって痛くなったりします。

IV型 関節頭の変形を生じているもの。関節のお皿の方と頭の方が直接当たるようになってしまっていてそれによって関節の頭が吸収、変形を起こしたものです。主にIII型からの移行が多いと考えられます。

V型 その他のもの

次号では、顎関節症の治療法についてお話しします。